



目に見え  
ないものの  
存在

川崎ゆきお

「目に見えないものを信じて、生きていく、というのはどうでしょうか」

妖怪博士付きの編集者が話し出したのだが、他にネタがないのだろう。最近の仕事で来るより、休憩で来ていることが多い。

「目に見えないものか、それはいくらでもあるだろう」

「そういうものではなく、この世のものではないような存在です」

「うむ、君なら当然そちらの方へ持って行くはず」

「そうです。神秘世界です」

「うむ」

これなら妖怪博士も何か返答しないといけない。そのあたりの専門家なのだが、それとその人の生き方はまた別だ。

「神秘的な存在を言い出す人は色々といいますよ。どれも科学的に説明できないような」

「妖精が見えるとか、妖精が教えてくれたとかかね」

「そうです。でもその場合、見えない存在じゃなく、見える存在でしょ。妖精を見たのですから」

「妖精も妖怪も言い方が違うだけで、似たようなものだが、特に妖怪には具がある」

「具」

「具体性じゃ。形がある。なくても音がするとか、空気が変わるとか。いずれも物理的にな。だから目に見えない存在ではなく、見える存在じゃ。だからこそ、見た人など本当はおらん。下手に具体性があるためじゃ」

「じゃ、目に見えない神秘的存在とは何でしょう」

「その場合の存在。存在という言い方は、何か固形物から発しているように見えてしまう」

「何か、思い当たることはありませんか」

「不思議な偶然とかがそうかもしれん。運命の赤い糸とかがそうじゃが、そんな糸など見た人などおらぬ。だから赤いか青いかも分からん。これこそ見えない糸じゃな」

「それぞれ、その種の話です」

「これは共時性だろう」

「シンクロするやつですね」

「シンクロ何とかと言うが、下は忘れた。舌をかむ」

「はい、ユングですね」

「ここから先が神秘主義になるかどうかのとば口でな。ただの偶然にしては話が良くできすぎておる。そこまで重なる偶然は、もう偶然とは言えない。何らかの意図を感じる。という話になるが、実際にはそのことばかり気にしているので、関連性を強引に付けている節もある」

「やはり錯覚ですか」

「本人が作ったストーリーだな。これを信じるかどうかは、本人次第。糸を紡ぐのは本人だ」

「最近紡ぐ人が増えたように思われますが」

「紡績の時代の復活じゃ」

「よく聞き取れませんが」

「不思議な偶然にストーリーを感じる。これが本人が勝手に関連付けて話を作ってしまうのか、あるいは第三者的なものが本当に作用しているのかが、とぼ口」

「当然、神秘ごとですから、第三者の関与でしょ。それこそが目に見えないものの存在の作用です」

「そちらへ持って行きたいのは分かるが、もしそうだとすると、本人も加担しておる。共犯だな」

「祟りなんかもそうでしょ」

「そうじゃな、本人が気にしておらぬなら、祟りなどない」

「しかし、目に見えないものの存在が警告したり、導いてくれたりするのでしょ」

「確かに警告はあるのう」

「ありますか」

「後で考えると、そうだったことが少しあるが、そのときは分からぬので、あまり役には立たん。せっかくのお知らせ、メッセージが、そうだと分からんから」

「はいはい。それは僕にもあります。一回じゃ分からないし、二回でも無理です。三回あたりから、何となく分かりますが、その警告が大きくなるか、さらに重ならないと気付きません。そして気付いたときはもう後の祭りだったことが多いです」

「まあ、その中には本当に現実的な因果関係も含まれておるんだらうねえ」

「そうです。神の声が聞こえるわけでも、啓示が降りてくるわけでもありません。同じような偶然が繰り返し現れる程度です」

「本人が紡いでいる糸の意図ではなさそうなほど、ぴたりとはまる時期の一致などは確かにある。これは個人レベルでの話でな。本人でしか分からん」

「それは背後霊や守護霊の仕業じゃありませんか」

「いや、守護霊はそんな囁きはせぬとされておる」

「じゃ、何でしょう。目に見えぬ存在の意図とは」

「まあ、自分を説得するための、方便程度だらう」

「説得」

「左へ行こうか、右へ行こうか、やめるか、やり続けるか、そのあたりを決めるとき、目に見え

ぬ神秘的意図を使う程度だろう。それにそんな神秘的な存在、何処に持ち込めばいい」

「神とか仏とか、天とか。妖精とか」

「君はそんなものを本気で信じるかね」

「いいえ」

「しかし、神秘ごとがあった方が好ましい。そういう口だろ」

「まあ、そうです」

「この話には解はない」

「だから神秘ごとなのですね」

「神の秘密を神秘と言う。そして個人の秘密を便所の秘密と呼ぶ」

「便所の秘密」

「略して便秘じゃ」

「ああ、便秘でしたか。何か通りの悪い話だと思っていました」

「詰まる話じゃ」

「はい」

了